

六	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一

外に尚書名分脱落の書翰等十数葉あり。頭部の番号は書翰集順序、参考記事は増訂の書翰所載による。書翰は従って同一形式のものであるが、その中の一通を例示しよう。

一筆底上仕候向暑の節御座候得共

殿極海陸益御機嫌克被遊御着存恐惶至極奉存候随而御手前様愈御勇健被成御勤珍重奉存候 御家内様共余御親類中様愈御安泰被成御波長亦目出度奉存候御兄様にも海陸無御障被成御供候間決而御急遣被成間敷候 海陸彼是御厄介に相成り御陰ヲ以首尾好着仕難有奉存候 扱乘船之御日種々困り御儀別難有奉存候 然日去る十日宗兵衛藏不存寄御用人本給被仰付難有仕奉存候 然上ハ御世話に相成可申候間無御速慮御差因奉頼候 宿元之義無御遠慮御差因是亦宜敷様奉希上候 而私義無 相勤罷在候間下障御休意被下候 右日時候御見舞御挨拶等以愚札如斯御座候 恐惶謹言

四月十七日

阿 十甫

惟敏 花押

因矢蘇右衛門様 余人々御中

猶、時節折角御保養被成御勤仕候様專一之御儀奉存候 乍筆示 (註：三行は用紙前縁に記入)

先日某田家が家屋内の改装をし友と聞いたので、不用の襖でも残つていないかと同家を訪うたが、一枚の襖も残つて居なかつた。私以機会ある毎に古い襖や古文書類を尋ねて見るが、現在の薪蒸ブームで、是等の古い物は殆んど焼却されて居る様である。

私は会員諸氏にお願ひしたい。旧家の襖や屏風の下張等には、これ等の古文書類がまだ蔵されて居るものと思ひます。家屋の薪蒸に當つては、もう無用のものとして空地に積上げて焼きすてるのが普通、そんな際を逸せず交渉して、焼却等より守り度いと希望する次第である。(以上)

研修記録

宇佐地方の社寺に学ぶ

十一月二十二日のバスによる研修旅行記

赤生町文化財調査委員 本会会員 伊 賀 重 雄

佐伯史談会が地域外研修の本年度最後の研修を今回は宇佐地方にもとめ、十一月二十二日に行わねばならぬと史談に報じられていたが、近頃私事が繁忙之きわめていたので、半ば参加を断念していたが、所用で佐伯に出たところ大寺前下羽柴先生の下よりお会いし、帝も空いているから参加しないかとのお誘ひがあり、その時は「つきりお返事が出来ないまま、別れたが、当日の朝になり、折角の好機逸すべからずと思ひ立ち、仕度こそこそにして御木のバス停に急いだ。

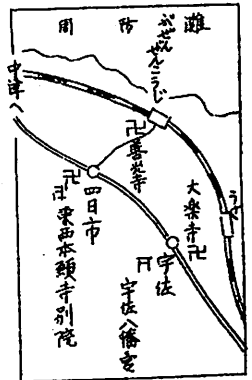
午前八時すぎバスが来去。満員に近い盛況、休生からは南海新報の吉良氏夫妻と泥谷氏と私の四人だけ、これ

に較べて堅田勢の多いこと、近頃の堅田、青山の方々の御精進ぶりに頭が下がる。

植松橋で泥谷氏が乗って全員そろった。バスは一路今日目的地向かう。そこで高木会長の挨拶、羽柴幹事の今日の日程の説明と会費参加者の紹介があり、その後車掌さんのガイドに耳を傾けながら、大分を怪て別府に十時前、ちよつと小憩の後出務、鹿川をすぎ未松峠を越える頃から山々はくぬぎ、はげの紅葉が目につき、車窓から移りゆく景色を楽しみ、時間の経つのも忘れ左殿、隣席の野々下氏(第一計店主)と自然の美について語り合う。

十一時宇佐に着き、先ず大衆寺を訪ねる。私はこゝを訪ねるのが今度で三回目、いささか羨望したかに見える。この大衆寺は南北朝初期のこの古寺には心をひかれる。この大衆寺は南北朝初期の元弘三年(一三三三年)宇佐大宮司公連(さきむら)が建てたもの、本尊の弥勒菩薩は国の重要文化財に指定されている。作像当時の世相が反映してか、僧侶が説教する形の像型と示し受動的でなく、佛の主張を大衆に示して居るかに拜される。面白い作像があり方で住職さんの説明も流暢一回しばらくはその御解説に耳を傾ける。私は寺域を歩いて、石塔群の鑑賞を試みたりする。然し時間がない。

一同は宇佐高校の中原氏に導かれて宇佐神宮に向かう。朱塗の太鼓橋を渡り参道を進む。両側に高くそそり立つ自然の社叢は、わが国では樹種が多いことでは古に出るものがないとされていて、国の天然記念物に指定されている。参道の両側に立ち並ぶ燈籠を見てかくと、本殿に近い程年号が古い。若宮の近くにあり楓は特によくはないの色々か、疎林の中まことに調和のとれた風致、神宮の朱の社殿と共に飛鳥時代をそのまゝ見るようである。本殿に着くと、自家用車で定着の高野顧問が何かと



一杯。神職佐藤福宜にお導きで特別なお計いをい左殿にて私は神宮の前に進み、宇佐神宮の歴史と八幡信仰の起源等懇切にお話を承る。終つて一同御神酒を戴き、社殿の前で記念写真を撮る。

神宮の森、鳩のなく八幡宮のお社、私は眼底にしつかと焼付けて参道を下りつゝ加藤氏と、神宮の森全体が古墳の形をして居るが、宇佐氏の強大な勢力と八幡信仰の組合せ、大神氏との関係など語らいつつ神宮会館について、湯茶の接待を頂いておそくなつた昼食をとる。

宇佐神宮に参拝する度毎に、神宮を中心に文化財の多いこと、特に国東、杵築などに對して神宮の影響力の大きいことを感ずる。国東の六郷萬山メ佛教文化を知ろうと思えば、先ず宇佐の歴史を知らなければ意義がないと考へる。

午後の行程は東西本願寺別院の町、四日市からである。四日市はむかし小倉街道の宿場取として発達した。日豊線の開通でその要衝から外れ左が、政治的経済的には依然宇佐地方の中心地としての土のを持ち続けている。

この四日市にすぎたるものは東西両本願寺の別院といわれ、伽藍規模の大きさでは九州最大と称されている。現在の建築物は西別院が天保七年、東別院は永禄五年の建築され左伽藍が、明治六年火災で焼失、明治九年に再建され左とまわれ、いざれも怒ヶヤキで釘一本も使われ

世話をして下さり、佐伯史談会一同昇殿参拝ということになった。

一同は大廣間に着度、修祓を受けた後おごそかに祝詞奏、そして巫女の舞う浦女ノ舞を拝観、全く感激で

ていないという。しかし建物のいたるは今日見たところ  
かやうは所々いよいよ思つた。

四日市の町を日頃よく歩いて、四日市高校の前に出る。  
道に沿つて数本の松並木の名残りも、その向うに古びた  
瓦ぶきの間がある。江戸時代当地方は幕府直轄の地とい  
わゆる天領に属し、その陣屋の跡であるという。御許山  
駿野で焼かれ、表門だけが残つたものである。

バスは四國道を走り、不時枝にある巨利芝原の善光寺  
にまいる。徳濃の善光寺、甲斐の善光寺とともにこの豊  
前善光寺は、日本三善光寺の一つとされてゐる。天徳二  
年(九五八年)空也上人が開いたと伝えられ、本堂は鎌倉  
時代の様式を誇るもの。唐風を加味し、折行五間梁間七  
間單層西注造り、内部は内陣と外陣に別れ、建長二年へ

二三年の多々良弘負が再興したと伝えられ、国指定の重  
要文化財である。四日市に於ける巨利が現在近建郷と継  
承されてゐることは、宇佐神宮の弥勒寺と思ひ合せ、巨  
利の信仰により支えられた為と考へられる。生憎く住職  
が不在で御案内をいれられなかつたのは残念であつたが

境内には河基空也上人の墓、応永三十年の宝篋印塔、建  
武二年の板碑などがあり、いずれも貴重なものである。  
善光寺を辞して四日市、宇佐を後にして帰路につく。  
山香所から國道を岐れ杵築に入る。道路がせまく路面も  
悪くて、後部座席の私交と体中が上つたり下つたり。市  
中に入つても狭く所並が密集して、城下町のそのま  
まの姿が散見出来る。國東洋馬の表玄関である杵築は、

道路の整備を急がねばならぬ。今日の研修最後の見学地、新築の杵築城は八坂川と高  
山川の合流した處に突き出た台地におり、応永元年水  
滸親直が築城したもので、今般杵築市が工費五千万円を  
費して天守閣及び公園を造り、観光は一役買はせたもの

の

御土史家木田先生の御案内をいたたき、きれいに復元な  
つた天守閣に陳列されてゐる回藩時代の遺物の説明をき  
き、杵築の歴史とつながる文化財にふれてうれしい。中  
でも御座船大成丸の模型並に船岩瀨、最勝寺の百林院如  
未坐像、長昌寺の織之曼陀羅、相原天龍の役の行者像、  
土居彩女史の孔雀図等々見るべきものが多い。  
天守閣楼上から展望すれば、遠く四國の佐多岬、中岡  
の田防の山々、近くは國東の山野が見られ、眺望絶佳と  
云うべきで、時間があれば公園に併列してある古塔群を  
見たいものと思つたが、なほしる時間を限られてしか  
け足研修で思いを果せなかつた。

今日一日の研修で感じたことは、左を見ず歩くだけで  
は時間の空費をするだけで、成果はあからない。佐伯史  
談会も十三年ほど、歴史をもつたから、もう少し焦点を  
しぼつて一つ一つの大事に研修してゆく方針を持つべきで  
そう云う段階に未だゐることを指摘したい。

帰路は龜川から別府にかけて車のラッシュアワーで一  
寸ずいの遅延、畑木で下車したのが午後七時半すぎ。今  
日一日紅葉の宇佐の山野を眺め、宇佐文化の発祥地たる  
神宮を中心と歩いて左が、一行の中に七八名の高校生が熱  
心に研修してゐる姿を見てうれしかった。今後は女子だ  
けでなく行動的な男生徒が沢山参加出来る様取願すべき  
であらう。

羽柴先生から今日の研修旅行記を書いてほしいと言わ  
れたのに応じて、私なりのペースで書いたが、終りに今  
日御案内下さつた宇佐高校の中原先生、並に杵築の太  
田先生に厚くお禮を申しあげて稿を終る。



羽柴先生から今日の研修旅行記を書いてほしいと言わ  
れたのに応じて、私なりのペースで書いたが、終りに今  
日御案内下さつた宇佐高校の中原先生、並に杵築の太  
田先生に厚くお禮を申しあげて稿を終る。